

フューチャースクール推進事業に関するメモ

岐阜聖徳学園大学 石原 一彦

1、フューチャースクールの持つ意味

①「教育の情報化」にとっての新たなパラダイムの創出

すべての児童生徒に常時接続の情報端末を与えることが教育上どのような意味を持つのか、またその可能性を提案することができる

- 一人一台の環境で、今までにない分かりやすい授業の実現と確かな学力の育成
- ユビキタス環境下での新たな学び（協働学習等）の創造
- 常時接続されたコミュニケーションツールを用いた教師と子ども、教師と保護者、教師と地域等の新しい関係性の構築
- 「未来の教育へのイメージ」を具体的に提示し、「教育の情報化」後進国脱却の口火を切ると共に、先生方を元気づける

②新学習指導要領に盛り込まれている「教育の情報化」を新たな情報環境で実行することができる

新しい学習指導要領にはそれぞれの教科ごとに情報手段を活用した効果的な学習方法が提示され、また教育活動全般を通じて情報教育をさらに深めようとする記述が散見される。このような「教育の情報化」に関する提案を本事業で構築される新しい環境で実行する。

- 「教育の情報化」のさらなる深化をはかる
- 情報環境の整備の重要性をアピールする

③電子書籍の普及に併せてデジタル教科書のプロトタイプを創造し、その活用のイメージを提案することができる

クラウドコンピューティングによって拡張された電子教科書を活用することで、新しい学習の姿を提案する。

- 拡張版デジタル教科書＝教科書＋資料集＋プレゼンツール＋ドリル＋評価テスト
- 個人学力カルテとデータに基づいた個別指導

2、フューチャースクールを成功させるためには

①確かな事業主体の選定が必要

実証フィールド（5校）の選定
実施事業体の能力
実証環境の整備（教室・校内・地域・家庭）
利用コンテンツの開発
支援体制の構築

②評価と支援（方向性の確認）が必要

実証フィールドにとって望ましい取り組みであるか
短期・中期の評価とそれに応じた支援策を講じる

③プロモーションが必要

公開授業研やシンポジウムだけでなく多彩な広報活動が求められる